

7-2					
主題	移動・移乗介助時にスライディングシート・ボードの使用がもたらす効果				
副題	「考える介護」への移行				
キーワード1	移動・移乗	キーワード2	考える介護	研究(実践)期間	15ヶ月

法人名	社会福祉法人 東京有隣会
事業所名	第2有隣ホーム
発表者(職種)	佐々木勇三(介護職)
共同研究(実践)者	山崎健司(介護職)、後藤ひろみ(介護職)

電話	03-3482-3911	FAX	03-3483-3938
----	--------------	-----	--------------

今回発表の事業所やサービスの紹介	第2有隣ホームは世田谷区にあり入所80名、短期入所10名の特養です。併設の通所介護事業所と協力し、施設が持つ専門性を地域に還元したいという思いから地域の方へ向けた講座を開いています。また家族の気持ちを考え「看取りケア」から「おもいやりケア」と名を改めて、寄り添った介護を目指しています。
------------------	---

《1. 研究(実践)前の状況と課題》
 当施設の職員による移動・移乗介助は、ボディメカニクスを活かしてはいるものの、利用者を人力のみで介助することが多く、それにより腰痛を発症・悪化させて仕事を休む職員もいることが課題であった。そのような中、厚生労働省の「職場における腰痛予防対策指針」が改訂されたことを受け、H26年度から介護・看護作業の中に人力のみで抱上げない移動・移乗介助の方法を検討した。
 日常的に抱上げない移動・移乗介助を行う為に、スライディングシート(以下、シート)とスライディングボード(以下、ボード)の使用を始めたところ、職員の腰痛予防はもとより、利用者にとっても安心・安全な介助器具ではないかと思えるようになった。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》
 本研究では、利用者個々の状態に合わせたシート・ボードの使用によって利用者・職員双方の安心・安全と利用者の痣等の事故報告

件数が減少することを期待して、シート・ボードの使用がもたらす効果を検証することを目的とした。

《3. 具体的な取り組みの内容》

1. 具体的な取り組みの流れ

- ①H27年2月、シート・ボードを購入。
- ②H27年2月、8月、H28年2月の計3回、抱上げない移動・移乗介助の研修を実施し、外部講師からシート・ボードの使い方の指導を受けた。
- ③シートは職員のウエストポーチに携帯するようにした。ボードは対象者が増える度に追加購入して居室に備えた。
- ④痣の出来やすい利用者、移乗介助量の多い利用者を選定し、利用者毎の状態を各職種間で共有し、シート・ボードの使い方の工夫を行った。研究当初は、対象者を4名として開始したが、使い方を習得していくにつれ対象者を増やしていき、H28年5月には46名となった。(入所定員80名)

2. 取り組み事例

対象者：A 氏（女性、52 歳）。重度の四肢拘縮・全身筋力低下があり、ADL は全介助。投薬の影響で骨折のリスクが高く、痣・表皮剥離も起こしやすいため、慎重に介助を行っていた。慎重に介助することで介護職員の腰部への負担は大きくなっていった。そこで、H27 年 8 月、移乗時にボードを導入した。

3. 職員アンケートの実施

研究期間：H27 年 2 月～H28 年 5 月

①調査内容：腰痛について

対象：介護・看護職員

時期：H27 年 2 月、8 月

（研修開始直後と半年後の 2 回）

②調査内容：シート・ボードを使用している気付き・思いについて

対象：介護職員 時期：H28 年 5 月

《4. 取り組みの結果》

1. 事例：A 氏の反応と痣等の事故報告件数の推移

A 氏は「こっちが楽」と受け入れ良好であった。ボード導入前である H26 年の痣等の事故報告件数は 26 件であったが、ボード導入後は H27 年：8 件、H28 年 5 月末：1 件と明らかに減少していた。

2. 当施設の事故報告件数の推移

移動・移乗介助に関連すると思われる痣・表皮剥離等の事故報告件数に減少傾向が見られた。

①H27 年 6 月～H27 年 8 月：155 件

②H27 年 9 月～H27 年 11 月：113 件

③H27 年 12 月～H28 年 2 月：105 件

④H28 年 3 月～H28 年 5 月：108 件

3. 職員アンケートの結果

シート・ボードの使用により、身体負担や腰痛による休業は減少した。さらに、利用者の観察やシート・ボードの適合を考えるとといったアセスメント能力が向上していた。

①身体的に辛い作業は何か

＝移乗介助：19.2%→16.7%

②腰痛で休業したことがありますか

＝はい：12.6%→6.7%

③痣・内出血・表皮剥離などに注目するようになりましたか

＝なった：74%、＝変わらない：23%

＝ならない：3%

④シートやボードを使用する必要があると思う利用者に使用していますか

＝している：77%、＝変わらない：20%

＝していない：3%

《5. 考察、まとめ》

シート・ボードを使用した移動・移乗介助は、利用者の安心・安全、利用者の痣等の事故報告件数の減少、職員の身体負担の減少や休業対策に繋がるだけに留まらず、職員が利用者毎の状態をより理解しようと努力し、介助方法を考察・実践するといった「考える介護」に繋がることが明らかとなった。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

本研究を行うにあたり、H28 年 6 月の家族会時に研究発表についての説明を行い、同意を得た。事例については、利用者本人と代理人に研究発表についての説明を行い、代理人の書面による同意を得た。

《7. 参考文献》

1. 移動・移乗技術研究会編 2014「今日から実践！“持ち上げない”移動・移乗技術」中央法規出版

2. 萩尾映子 2013「特別養護老人ホーム東山の腰痛予防の取り組み」ふれあいケア 19（13） 22-26 全国社会福祉協議会

3. 岩切一幸、高橋正也 2007「高齢者介護施設における介護機器の使用状況とその問題点」産業衛生学雑誌 49 12-20 日本産業衛生学会

《8. 提案と発信》

新しい取り組みを施設全体に浸透させるためには、ねばり強く継続する事が非常に大切であると考えます。利用者、職員双方にとってのメリットが大きいことを実感出来ることで、介護業務を改善する職員のモチベーションは高まり、質の向上へと繋がっています。